

生きるとは分かち合うこと、弱者と

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
151
2022.12

公益財団法人PHD協会
2022年委員会報151号

REPORT インドネシア出張レポート

PHD Movement vol.34

「私は差別に負けない」、サビナさんが歩く道

特集 市議会議員サビナさんインタビュー

PHD LETTER Volume.151

Contents

- P.2-4 インドネシア出張レポート・フォローアップ
- P.5-6 ウクライナ避難民支援
- P.7-8 **PHD Movement** vol.34
「私は差別に負けない」、サビナさんが歩く道
～ 第一号研修生が照らすPHD研修の役割と可能性～
- P.9-10 ネパール2018年度研修生サビナさん インタビュー
- P.11-12 2022年度研修生レポート
- P.13 2022年度研修生 4月～10月研修
宇宙船地球号で暮らす-多文化共生してる? -
- P.14 PHD活動紹介 2022年7月～10月
- P.15 PHDNews

表紙写真/インドネシア・タラタジャラン村、小学校の帰り道



PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 151号

発行: 公益財団法人PHD協会
住所: 〒653-0836 神戸市長田区
神楽町3丁目7-4
電話: 078-414-7750
FAX: 078-414-7611
E-mail: info@phd-kobe.org
URL: http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座: 公益財団法人PHD協会
01110-6-29688

REPORT

インドネシア出張レポート・フォローアップ

2022年9月30日～10月7日

2年間コロナ禍で研修生たちの国・村を訪問できませんでしたが、やっと今年度インドネシアのタランバブンゴ地域を訪問することができました。今回の主目的は、2023年度の研修生選考と元研修生たちのフォローアップ。元研修生たちの近況をご報告します。

研修担当 芳田弓生希 = 文



ダリスマンさん(2013年度) **カユジャングイ村**
2017年に結婚、長女は4歳半。2018年に農業グループを作りメンバーは12人で田畑の耕運を一緒にするほか、コーヒーや玉ねぎ栽培のために、計画書や提案書などを作成している。

アフリタさん(2004年度) **カユジャングイ村**
朝7時半から11時まで保育園に勤務。先生は2人、園児は15人。タベ村のように良い保育園にしたい。昼からは農業で玉ねぎ、豆、唐辛子などを販売用に作っており、金・土曜日は村の観光名所(滝)近くにお菓子の店を出している。

ゾンさん(2015年度) **カユジャングイ村**
畑で唐辛子を栽培、2週間で16kgとれて700円/kgで売った。人の畑を耕運する仕事をして日当1000円を得ているが、山肌の急斜面なので大変。採卵用の鶏が2羽いる。



レニさん(2018年度) **カユジャングイ村**

2019年7月に結婚。長女は2歳に。帰国後はパダンで1ヵ月洋裁の勉強をした後、自分や家族の服を作る。裾上げは100円で請け負い、他には小学校の制服にワッペンをつける依頼をうけるなど、小さな仕事が週に1回ぐらいある。カデル(保健ボランティア)としての活動は継続、月に1回地域のカデルの会合があり、血圧や人口、家族計画などについて話し合っている。1ヵ月ほど前に家の裏に店を作って、お菓子や砂糖などを売っている。



～私たちは脇役、ヘルパーにしか過ぎない～

温故知新 岩村語録 その23

「一生かかっても、ネパールのすべてを理解することは出来ないであろう。しかし、大切なことを一つ学ばせていただいたように思う。それは、ネパールを舞台のドラマの主役は、あくまでもネパールの人達であり、私たちは脇役、更に言えばヘルパーにしか過ぎないということである。君達の手伝いを必要としない日が、一日も速く来るように、そういうネパールを創るために君達は行くんだね。」

(わが愛はヒマラヤの子にー孤児マヤの記録) 岩村史子著

上記は史子さんの著作に岩村先生が寄せた文章の一説。困窮外国人への直接的な支援に関わるようになり、上記の言葉を痛感する日々である (さ)





マスラルさん (2005年度) **タラタジャラン村**
玉ねぎ、唐辛子、サトウキビ、トマト、米を栽培。上手な人は年に3回とれるといわれている玉ねぎを、マスラルさんは年4回も収穫。自家用車を使ってタクシーの運転手の仕事も。



アルウィさん (2001年度) **タラタジャラン村**
自宅で子どもたちにコーランを教えている。山羊を5頭飼育し、糞はたい肥にして畑で使う。米とサトウキビ、唐辛子を栽培。自宅周辺で自給用の野菜を作っている。引き続き有機農業で孤軍奮闘中。



ダスウィルさん (1999年度) **タベ村**
初孫誕生。自給用に米を、山の畑ではコーヒーとシナモンを栽培。州都パダンにある大学で政治を勉強中で、来年卒業したらもう一度州議会議員選挙に出馬したいと考えている。



エリさん (2003年度) **タベ村**
平日は孫のお世話で忙しい。「パティックトゥリス KBAタベ」を立ち上げ、5人ほどの女性たちとパティックトゥリス(手描きろうけつ染めの布)を作っている。エリさんは主に土日に活動。

エリザさん (2011年度) **タラタジャラン村**
村の保育園で毎日8時～11時まで働いている。自宅でお菓子、飲料、雑貨などを売る店もしている。子ども(現在1歳半の次男)が5歳ぐらいになったらまたミシンで服を作りたいと思っている。



メラティさん (2014年度) **タベ村**
夫と共に農業と牛(持ち主は別)の世話をしている。7月に購入した牛を肥育し、売る時に利益の60%をもらい、残り40%は持ち主が取る仕組み。でも、実はメラティさんは牛が怖くて苦手。



リンダさん (2016年度) **タラタジャラン村**
月に1回のカデール(保健ボランティア)の活動を続けている。昨年8月に生まれた子どもがもう少し大きくなったらお休み中の店を再開したい。

プットリさん (2019年度) **タラタジャラン村**
帰国後は、ミシンを購入し、まず最初に自分の服を作った。製図から縫い終わるまで1週間かかった。その後母の服など3着作り、村の人たちからはズボンの裾上げや服にポケットを付けるなどの依頼を受けた。村の女性たちに洋裁の勉強について聞いてみたが、ミシンは怖い…とまだ教えるまでには至っていない。昨年8月に結婚。11月13日長女出産。



インドラさん (2010年度) **タラタマ村**
妻の実家(タランバラット:タランバング地域中心の村)に住んでいる。稲作(年に2トン×2回収穫)は自給と販売用。週に4日、服を市場で販売する仕事をしている。今は次男が幼稚園に通っていて妻は教員のため、自分が次男の面倒を見ている。次男が小学校にあがったら農業(米、唐辛子、玉ねぎ)と牛の肥育をしたい。



ベリスマンさん (2008年度) **シランジャイ村**
週6日アラハンパンジャン(車で30分ほどの大きな町)に通い、大工仕事。日当は1500円。牛を1頭肥育。3か月前に生後6カ月の牛を17万円で購入。2歳になったら25万円で売る予定。山の畑ではバナナとサフランを栽培。米は自給用で3か月前に600kg収穫した。高校生の娘が寮生活をしているので大変。



デフィさん (2017年度) **タベ村**
9月28日に長女を出産。MISタベ(小学校)の教員に、産休あけて復帰。歯磨きの定着には苦戦しているが、学校の前にあったお菓子を販売しているお店は子どもたちの「お菓子をダラダラ食べる」ことにつながるので、校長先生たちと話をしに行った結果、撤退したそう。

ロザさん (2009年度) **シランジャイ村**
2014年からタベ村の組合で毎週金曜日10-19時勤務。担当は出納係。唐辛子と米を栽培している。夫が新居を建設中。





© Romanovych Oksana

ウクライナから避難してきたバレエダンサーによる公演 (ArtTheater dB KOBEにて)

REPORT :ウクライナ避難民支援

佐久間 隆 = 文

PHD協会は、ウクライナから兵庫県に避難されてきた人たちを対象に、5月から支援活動を行っています。みなさんに少しでも安心して日本で生活を送ってもらえるように、これまで「アウトリーチ型の生活相談支援」と「セーフティネット型の日本語教室」の2つの活動を実施してきました。

どを行ってきました。加えて、フードバンクやPHD協会の協力企業・団体、支援者の方などから受け取ったお米や野菜、冷凍食品などの食料品や、ティッシュペーパーや生理用品、自転車、コープこうべ商品券、ファンヒーターなどをウクライナのみなさんに届けてきました。

アウトリーチ型の生活相談支援

本活動では、特に行政からの支援が届いていないウクライナからの避難民の方々を訪ねて、困りごとをお伺いして必要な支援を届けてきました。11月1日時点で兵庫県には98名のウクライナ避難民の方がいらっしゃいますが(出入国在留管理庁)、PHD協会では、これまでに、神戸市、芦屋市、川西市に住む33世帯69名の方たちに支援を行ってきました。15名からは、日本で仕事がしたいという相談があり、就労に向けた支援を行いました。PHD協会と以前より協力関係にあった企業や、他支援団体や神戸商工会議所からご案内頂いた企業にご紹介させて頂くなどして、これまでに8名が長期的な雇用先を見つけられました。加えて2名の方には、3日間の日払いのお仕事(コロナ支援物資の梱包作業)も紹介させて頂きました。

就労以外にも生活に関する多くの相談を受け支援を行いました。具体的には、引越の手伝い・家具の設置、転入手続きなどで区役所同行、病院への同行、運転免許切り替え試験の同行、コープこうべのコーピーカード申請手伝い、行政や難民事業本部との連絡・調整、他支援団体が行う支援の紹介、各種質問に対する情報提供な



就労支援、職場の事前見学

【これまでの支援件数】 2022年10月末時点

- ・アウトリーチしたウクライナ避難民世帯数：33世帯69名
- ・生活相談を受けた件数：232件
- ・同行支援を行った件数：34件
- ・食料品など生活物資を提供した件数：190件



生活の相談

セーフティネット型の日本語教室

本活動では、神戸市北区の市営住宅にある集会場を利用させてもらって、週2日、1日2クラス(1時間半ごと)の日本語教室を開催してきました。この市営住宅は市内でも比較的遠隔地にあるため市の中心部で開校されている日本語教室へのアクセスが悪く、この市営住宅に住んでいるウクライナ避難民のみなさんから日本語教室を近くで開催して欲しいという要望を受けて実現しました。

7月25日から開始された日本語教室には、これまでに8歳から69歳までの10世帯17名が参加して、日本語の挨拶、モノやお金・時間の数え方、買い物の仕方など、生活に直結するような日本語を中心に学習されました。開校当初に受講していた15名の中には、学校がはじまったり、仕事が決まったり、ウクライナに帰国して、教室に来られなくなった人がいます。その一方で10月に新たに加わった方も2名いて、現在は7世帯8名が主に出席してくれています。また教室を通じて避難民のみなさんの困りごとを聞くことで、セーフティネットとしての役割を果たすことを目指していて、これまで3名の受講生から6

つの相談を受けて対応してきました。なお、集会所の手配においては市営住宅の自治会にご協力頂き、また日本語教室の教科書は北区社会福祉協議会からの提供を受け日本語教室を開講しています。

【これまでの支援件数】 2022年10月末時点

- ・日本語教室の開催回数：43回
(23日間/43クラス、1クラス/1時間30分)
- ・日本語教室への参加者数：延べ166名(実数17名)
- ・日本語教室を通して相談を受けた回数：6回



日本語教室の一コマ

PHD協会は引き続き、ウクライナからの避難民のみなさんが少しでも安心して日本で生活を送っていただけるように支援を行ってまいります。本事業は、2022年7月11日までは赤い羽根共同募金の助成を受けて実施し、2022年7月12日からは日本財団の助成を受けて実施しています。



新スタッフ紹介



ロマノヴィッチ・オクサナ

ウクライナ支援 担当

こんにちは。7月からウクライナ支援担当としてPHD協会に働いています、ロマノヴィッチ・オクサナと申します。私はウクライナ北西部にあるリヴネの出身で、キウ近くの大学で会計の勉強をしてウクライナで会計士として働いていましたが、海外で働きたいと思い2017年に来日しました。日本に来てからは、日本語を勉強しながら会計に関する仕事をしてきました。ウクライナで戦争がはじまり、私の姉と姪、義理の妹が神戸に避難してきました。そして避難してきた他のウクライナの人たちも助けたいと思い、PHDで働きはじめました。

PHDでは、ウクライナ語/ロシア語の通訳と避難民の方から連絡や相談を受ける仕事をしています。どうぞよろしくお願い致します。

PHD Movement vol.34

「私は差別に負けない」、サビナさんが歩く道
～第一号研修生が照らすPHD研修の役割と可能性～

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～



© Yusuke Furuya

2018年度の研修生サビナさんが市議会の議員に当選した。詳細は特集に譲るとして、ここではサビナさんが被差別カースト「ダリット」からの第一号研修生であったという点に着目し、地域からの「第一号研修生」という視点でその系譜や意味合いを考えてみたい。

活躍した第一号研修生たち

研修を開始した1982年にネパールから来日したバト・ピスタさんは、地域からの第一号研修生として活躍した代表格。帰国後は自らNGOを立ち上げ、保健衛生や農業、教育、水事業など生活向上全般において地域に貢献し、今なお第一線で活躍中。ネパールからはその後も多くのリーダーを輩出した。ポカラのラダさん(1983年)は地域の貧困女性に編み物や識字教育をすることで状況を改善させた優れたリーダーだった。同年のネパール・ダイレク郡からの研修生サンバさんは岩村先生の後継者として地域の保健医療を支えた。

他の国でもタイからの研修生第一号、プリチャーさん(1985年)は教育分野で活躍した後、起業して多くの雇用を生み出し、カレン民族のリーダーとして活躍している。フィリピンからはエディさん(1999

年)が地域のリーダーとして、後進の育成に尽力した。

インドネシアからは海の村第一号はアリさん(1987年)、山の村第一号はダスウィルさん(1999年)。アリさんは村長として、ダスウィルさんも村のリーダーとして地域の選挙に立候補するなど、出身村を超えて地域のために今も尽力している。

ミャンマーの第一号ウインさん(1992年)はNGOワーカーとして現在も活躍中で、農村部からの第一号トゥンティンさん(1993年)は多くの人から尊敬を集める村のリーダーだった。近年ではモーママさん(2013年)が軍政によって中断していたミャンマーからの研修生再開第一号だった。地域からの第一号ではないが、民政移管後初の研修生として期待を集め、今では次世代のリーダーとして活動の中心を担っている。



バトさん



ラダさん



サンバさん



プリチャーさん



エディさん



アリさん



ダスウィルさん



© Yusuke Furuya

第一号が活躍する理由

なぜ地域からの第一号研修生の多くがリーダーとして活躍するのか。その要素は来日前と帰国後の二つがあると感じる。

まず来日前、地域からの第一号は押しなべて地域の期待感が高く、選考にも多くの人が集まる傾向がある。よって、そもそも高い競争率を勝ち抜かないと日本に来られない。そして、第一号ということは先輩がいない。PHD協会がどんな組織なのか、日本でどのような日々が待っているかわからない。それらの見えない恐怖に打ち勝つというところから始まる。そのプロセスで覚悟が生まれる。

そして、帰国後も地域からの第一号として日本での研修の成果を発揮するよう期待の目で見られる。加えて、後輩の指導にもあたらないといけない。それらの日々がリーダーとしての成長を促すのだと強く感じる。

サビナさんへのエール

そしてサビナさんである。サビナさんはダリットであることで幼少期より差別を受けてきたが、それに負けずに生きてきた。その様子はPHDレター139号にインタビューが掲載されている。ぜひ読み返していただきたい。

「一年間の研修は準備期間、本番は帰国してから」、これは研修生に何度となく言う言葉である。村から出てきて日本という異国での一年は研修生たちにとって大冒険であることは間違いない。しかし、その本番は帰国してから、日本での学びを地域に生かすことが大事、というメッセージである。同じ言葉を今一度サビナさんにも贈りたい。サビナさんは既に帰国後、地域に貢献している。コロナ禍において

もダリット女性たちが困窮する中、リーダーとして支援に奔走。その上で今議員となったことは素晴らしい。しかしながら、議員となったのはゴールではなく、スタートである。ぜひ今までの経験を活かして、ダリットの人たちのために頑張ってもらいたい。それがダリット以外の人たちのためにもなる。PHD協会も国内で困窮している外国人の方たちのための活動に奔走しているが、それは日本に住むすべての人たちのためにもなると思って活動している。ネパールと日本、距離は離れているが私たちの志は繋がっている。同志として共に切磋琢磨していきたい。



会報 139号



PHD Movement



特集 「村をよくする力になる」市議会議員一年生

ネパール 2018年度研修生 サビナさん、インタビュー

真直ぐに落ちてくる広く太い太陽の光。9月は稲のむせかえるようなにおいがしていた。いつもは静かなネパールのクンタの街に鼓笛隊の音が鳴り響いた。村の人たちは久々に鳴り響いた大きなその鼓笛の音色に視線を向けていた。

スーツやサリーを着て正装した50歳前後のネパール人たちが100名ほどの群衆で歩いている。今日はネパールの憲法記念日。このクンタの村長を始め、議員の人たちが街を歩きネパールが近代化を迎えた記念すべき日を祝していた。

その中にネパールの伝統的な服を身に纏ったサビナさんがいた。サビナさんは自分の両親くらい年齢が離れている人たちの中に一人だけいる娘のようで、でも周りの人に気負いする様子もなく、楽しそうに話しながら歩調を合わせていた。もうすでに議員の中での居場所が確立しているように見えた。

当選した当初に連絡した時には「今は忙しいです」と初めての議員としての大役、そして慣れない仕事にあくせくしているメッセージが届いていた。

現在は議員に当選して4ヶ月のサビナさん。表情は昔の穏やかなままで、

でもこの大勢の中でも堂々としている佇まいは、以前より自分に自信を持っているような感じだった。

選挙に出馬して議員になった今。サビナさんはどのような生活をし、そして何を思っているのか。ネパールの未来をどのように見ているのか？サビナさんに今の気持ちをインタビューしてみた。



Q. なんで選挙に出ようと思ったのですか？

サビナ：PHD協会の影響もあり、私はずっと自分の村をよくしようと思っていました。今回、ネパールコンGRESSという政党から選挙に出る事ができました。政治の力を使って、自分の村を良くしていきたいと考えています。

古屋 祐輔 = 聞き手・編集・動画制作・写真
ネパール在住5年。動画クリエイター。
カトマンズにて柔道などのスポーツ・教育サポートを行う。

Q. PHD協会での研修を終え、ネパールに帰ってきてから何をしましたか？

サビナ：女性グループの中には、読み書きができない人が多くいました。ネパールに帰ってきて、PHDの最後の報告会でプレゼンしたように女性に読み書きの指導をしました。その後にはコロナの問題が始まりました。その時は、日本人とPHDのお陰で村の人たちに食事を配りました。*そして村にトイレを作ったりなどの活動もしました。ただ、村で暮らして自分のための仕事は何もありませんでした。畑とか田んぼの仕事だけでした。ですが、今はオンラインで日本人へネパール語を教える仕事も始めました。

*2020年度「ダリット」への食料配給及び感染症拡大防止のための啓発活動、公衆トイレと共用水道設置・活用による感染拡大防止活動（公益財団法人庭野平和財団の助成金を受けて実施）

Q. 選挙に当選してからどうでしたか？

サビナ：最初はミーティングがたくさんあり過ぎてとても大変でした。ミーティングだけではなく、道路を作る計画を考えたり、学校の教育を見にいたり村のために予算の計算をしています。

Q. 選挙に出て良かったことは？

サビナ：今まで政府はどのようにして人々をサポートしているか分からなかったです。だけど政府も私たちの村を考えてくれていると知れた事が良かったです。そして、前よりも村の人たちと近くなったので村の人たちの気持ちもよく分かるようになりました。

Q. ミーティングでどんなことを話しますか？

サビナ：私はミーティングの中では自分の村の問題を話すようにしています。例えば村の教育とか、村の保健衛生の問題について話すようにしています。だから私は村の人の話を聞くのはとても大事で、どんなに忙しくても村の会議には出て、村の人たちの声を聞くように心がけています。村の会議と政党での会議が重なる時も、村の会議を優先するようにしています。

Q. 今、大変なことは？

サビナ：今、大変なことは村の人たち皆が私に期待をするんです。村の道路を良くしてほしいとかの話なら私も聞くことはできますが、家庭の話などを私にされても、私の力にも限りがあるので難しいです。他にも村の人たちが病気になった時に、私に電話することがあるんです。でも私は医者じゃないので、病気まで治すことはできません。また私の村には300人ほどの人が暮らしています。その人全員に同じサポートするのは難しいです。道路を作るにしても、私の家の前を一番先に作ってほしいと言われて、頭痛くなることもあります。



お寺建設の視察



視察日の小休憩



学校でノートを配る活動に同行



市で建設中の公園の視察

Q. 政治の中でのカースト（身分）について

サビナ：私はダリット（不可触民）として今、政治に参加しています。今の議員は色々なカーストの人と一緒にしていて、市長も副市長も私より上のカーストの人です。ですが政治のことでダリットの差別はないですし、下のカーストの私の意見も同じように扱ってくれて、みんな同じです。政治の世界では差別がないので、この差別のない世界がもっと村でも広がってくれればいいなと思っています。

Q. 最後にみなさんへ

サビナ：私は今回選挙に当選して村を変えるチャンスがもらえました。まだ私は初めてのことが多いので最初の一年目はたくさんの人からたくさんことを学んで、その後で私は村を変える力になりたいです。これからもみなさん応援よろしくお願ひします。



サビナさんインタビュー動画は、PHD協会Youtube「草の根」チャンネルにて配信中。

PT 2022年度研修生レポート

芳田 弓生希 =文・編集



セティア ブディマン

インドネシア / 27 歳

4月から1年ほど「ちくせん」での仕事を
べんきょうしています。ちくせんでは、少しの田んぼ
や畑をよくやんせをべんきょうしました。

日本で牛のえさはくさではいじょうです。
かんそうさせたくさをあげます。はいじょう
にはとろろこし、こめぬか、こめか、たいす、おす
ぶら、フルファ、ふさま、カカオ、どろりんなど
いろいろなものがはいつています。インドネシア
で「なまのくさ」できびこめぬかをあげます。
もてもちがいます。

牛が「びんき」にならないうちは「ぎゅうしゃ」に
はいるまえに「ふく」と「くつ」をしょうとくします。
ほかの牛に「かんせん」しないように「びんき」の牛
に「くまり」をはやくあげます。「けんき」なるまで「くまり」
を「くまり」あげます。それに「まじり」ぎゅうしゃを
きれいにします。

それから、サレツツのつくりかたが「わがり
れた。くさをさき、あつめり、がわがり、そして
ひっくりかえします。かくそうさせたくさを「らーん」に
して、ラップして「あつ」をぬきます。はしょうかんくさ
に「あつ」さんさん「はつ」させます。

ゆき（ゆき）が「あつ」で「あつ」しました。かんじ
くたいが「あつ」かした「つくりかた」が「わがり」れた。
かんじくたいは「あつ」つちを「あつ」かします。あつ
は「あつ」の「あつ」になります。

あつ（あつ）は「あつ」で「あつ」な「あつ」をつくら
れるのを「あつ」はじめました。そうすると「あつ」は
「あつ」ひょうきになります。

けんしんするときに「せんせい」は「あつ」に「あつ」
あつた「あつ」に「あつ」か「あつ」き「あつ」をつくら
あつた「あつ」に「あつ」か「あつ」き「あつ」をつくら
あつた「あつ」に「あつ」か「あつ」き「あつ」をつくら

ブディ
インドネシア

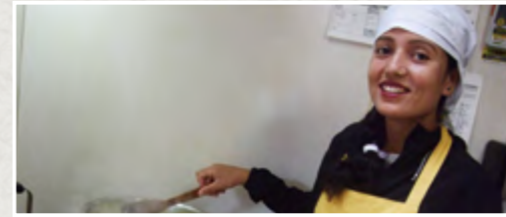


仔牛のエサを作るブディさん（左）

タベ村や周辺の村では、牛を肥育する際の餌は主に刈り取ってきたばかりの草が中心で、時々米ぬか
か混ぜる程度でした。日本では、乾燥した草や発酵させた草（サイレージ）に加えて、配合飼料を
与えています。また、繁殖用（母牛と仔牛）、肥育用、乳牛用で重視される餌の内容が異なることを学
びました。

日本の酪農・畜産業界では、海外から輸入される飼料の原料や牧草の高騰で、輸入飼料に頼って
いる農家は苦しい経営が続いていると聞きます。ブディさんは、帰国後まずは10頭ぐらい牛を買い、
半分は繁殖もう半分は肥育という形で始めたいと考えていますが、いかに経費を抑えて牛を買うのが
課題です。大学で学んだ発酵飼料の素材は、村では手に入らないものがほとんどです。指導者の
方々もおっしゃっていますが、なるべく周辺で取れるものを中心にして牛の餌を作っていく必要があ
り、特に基本となる草をいかに確保するかを考えていかねばなりません。帰国後のことも考えながら、
残りの研修に励みます。

PT 2022年度研修生レポート



アシカ・チャルマカール

ネパール / 24 歳

日本は「あつ」な「あつ」が「あつ」な
ていて「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

日本の「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な
から「あつ」な「あつ」な「あつ」な

アシカ
ネパール



ゆき保育園にて、
最終日に子どもたちからのプレゼントをもらう

日本の保育園では小さい時から自分のことは自分でできるようにスタッフが接していること、園児た
ちは自分のタオルやコップなどを使っていること、そして給食の献立が毎日違うということに気づきま
した。アシカさんの村では、大人が食べさせたり着替えさせたりするので、4-5歳まで自分でできる
ようにならないと言います。また、生後6か月ぐらいから大人と同じものを食べさせる、栄養のことを
あまり考えずに子どもの食事を作るなど、栄養面で課題があるため、村に帰ったら女性グループのメ
ンバーと共有したいと考えています。

また、日本では障がい者の方たちの働く場があり、学校には特別支援学級があり、発達障がいの
子どもたちが集えるデイサービスや様々な理由で親と暮らすことができない子どもたちが安心して暮ら
し、家族とまた暮らせるようにサポートする施設があることを知りました。大学で教育を学んだアシカ
さんは、障がいを持った子どもが学校教育を受け続けることができるようにしたいと考えていますが、
方法を模索中です。

2022年度研修生 4月～10月研修

■ ブディさん

神戸YMCA学院専門学校 (日本語/神戸市中央区)

中野宗嗣さん (酪農・有機農業/丹波市)

谷口正徳さん (牛繁殖/豊岡市)

真柴三幸さん、朝子さん (牛肥育・飼料・サイレージ・有機農業/佐用郡佐用町)

橋本慎司さん (養鶏・有機農業/丹波市)

谷口正徳さん (牛繁殖/豊岡市)

【講話・見学】

田中畜産 (牛繁殖・肥育・販売/丹波篠山市)

木村牧場 (牛繁殖・肥育・販売/丹波篠山市)

上田畜産 (牛繁殖・肥育・販売/美方郡香美町)



わらの匂いを嗅ぐブディさん

【共通研修】

浜地律知さん (口腔衛生/神戸市長田区)

坂西麻衣さん (日本語/神戸市長田区) 全8回 (ブディさんは全11回)

■ アシカさん

神戸YMCA学院専門学校 (日本語/神戸市中央区)

滞在: 杉浦和美さん (高砂市)

はらっぱ保育所 (保育/西宮市)

滞在: 前田公美さん、河田博子さん

友愛幼稚園 (保育/神戸市中央区)

ゆき保育園 (保育/高砂市)

滞在: 杉浦和美さん

新生会 つとポート (障がい者福祉/西宮市)

放課後等デイサービス コゲラ (福祉/西宮市)

滞在: 杉浦和美さん

ルピナス高砂 (児童福祉/高砂市)

滞在: 神吉泰彦さん・道子さん

石屋小学校 (教育/淡路市)

滞在: 徳梅リカさん

指人形で子どもたちと遊ぶアシカさん(左)



宇宙船地球号で暮らす

-多文化共生してる?-



2006年、神戸YMCA余島キャンプ場にて (筆者:中央、右から4人目)

尾上 尚司

PHD協会 理事

公益財団法人ひょうご子どもと家庭福祉財団

常務理事

神戸市長田区生まれ、職場が神戸YMCAで英語、日本語教育が長かった私は、ずっと多文化共生の日々だったように思われます。

若いころから多くの外国人英語教師と席を並べていました。その際インド国籍の女性が教員として採用されました。その方から相談で「マンションの管理人が部屋までゴミを取りに来てくれない。あなたから頼んでほしい。」カーストの高位の方だったので。日本では考えられないことが日々起こる、そういう生活で気づいたことです。

「違い」と「間違い」は日本語ではよく似通っていますが、英語では「mistake, error」と「difference」はまったく異なる言葉です。日本語を使う私たちは、「自分と違っていたら間違っている」と思いがちなのかもしれません。若い人でも他者の行動について「それ違うと思うわ」と「間違っているよ」という意味で使っています。

また婉曲表現を使うのが肯定される私たちは、英語を母国語とする人の要望を、半分断りたいとき、無理だなと思うとき、「考えておきます」という意味で、英語でしばしば「I am going to think about it」と使います。それを聞いた彼らは、「本当に前向きに考えてくれている」と思っているのです。誤解の始まりです。

今わたしの職場で運営している幼児さんの通園施設でも、インド、中国、ベトナム、インドネシアの方が来られています。異なる文化の中でチャレンジされる子どもたちとご家族に寄り添って、ともに生きていきたいと思っています。

PHD 活動紹介

2022年7月～2022年10月

- 7月
- 1日 メンタルヘルス勉強会-KOBEウクライナ避難民支援ネットワーク勉強会 (佐久間)
加東市国際交流協会訪問 (坂西、中村、濱)
- 4日 NGO神戸外国人救援ネット 法人化委員会 (坂西)
神戸学院大学講義 現代社会学部「社会防災特別講義Ⅳ」(坂西)
- 5日 若手NGOスタッフ勉強会 (坂西)
尼崎市総合政策局ダイバーシティ推進課 来訪 (坂西、濱)
- 6日 篠山ロータリークラブ 例会 (濱)
新職員オリエンテーション (坂西、佐久間、三宅)
- 7日 NGO相談員ランチミーティング (坂西)
NHK神戸放送局 藤江さん 来訪 (坂西)
運営協力委員 森口育子さん 来訪 (芳田)
- 8日 ウクライナ避難民 歓迎会 (坂西)
阪神シニアカレッジ 講演会 (坂西)
- 10日 プラスONEネット 料理会 (濱)
- 11日 NGO神戸外国人救援ネット 法人化委員会 運営委員会 (坂西)
居住支援シンポジウム2022 (濱)
NGO・外務省定期協議会 (坂西、三宅)
- 13日 コープこうべ 中野さん、本田さん 来訪 (坂西、濱)
- 14日 神戸定住外国人支援センター フフさん 来訪 (坂西、佐久間、濱)
- 16日 加東市連合婦人会 交流会 (芳田)
- 18日 梅光学院大学サービスラーニング (坂西)
- 20日 中央共同募金 交流会 (佐久間)
草の根技術効力事業・NGO等提案型プログラム・JICA基金活用事業 実施団体会議 (坂西)
- 22日 認定NPO法人ムラのミライ 中田さん 来訪 (坂西、佐久間、濱、芳田)
- 24日 米山記念奨学セミナー (坂西、濱)
- 26日 外国人版トライやるウィーク参加者向けオリエンテーション (坂西、中村、濱、三宅)
- 27日 NGOの放課後 (坂西)
兵庫県行政書士会神戸支部 来訪 (坂西、佐久間、濱)
- 28日 定例スタッフ会議 (古寺、坂西、佐久間、中島、中村、濱、芳田)
職員研修:日本の難民受け入れについて。講師:評議員 中尾秀一氏
- 29日 One World Festival for Youth 運営委員会 (坂西)
- 30日 兵庫県ユニセフ協会設立20周年記念講演会 (坂西)
- 31日 第16回多文化共生のための国際理解教育・開発セミナー ～6日 (坂西、中村)
- 8月
- 1日 神戸YMCA大会実行委員会 (坂西)
HYOMIC会議 (坂西)
- 2日 多文化共生セミナー ～5日 (坂西、中島、中村、濱、三宅)
- 3日 六甲ウィメンズハウス運営員会 (坂西)
- 4日 NGO相談員ランチミーティング (坂西)
- 6日 加東市国際交流協会 畑×多文化共生イベント (坂西、中村、濱)
- 8日 NGO神戸外国人救援ネット法人化委員会 (坂西)
- 10日 NGOの放課後 (坂西)
三田市就労支援セミナー打ち合わせ (中村)
- 21日 Summer SDGs Festival for Youth (中村、三宅)
- 23日 KICC三宮日本語ブラザ (佐久間)
- 24日 「多文化共生」を考える研究会2022 (坂西、佐久間)
大阪YMCA評議員会 (坂西)
- 25日 定例スタッフ会議 (古寺、坂西、佐久間、中島、中村、濱、芳田)
- 26日 職員研修:メタファシリテーション講座① 講師:中田豊一氏
- 30日 【NGOの放課後】第1回 魅力向上・キャリアチーム勉強会 (坂西)
- 31日 篠山ロータリークラブ例会 (濱)
- 9月
- 1日 HYOMIC会議 (坂西)
- 2日 NHK大阪取材:NGO相談員 (坂西)
- 4日 市民社会におけるコミュニケーションのあり方を考えるフォーラム (坂西)
【日本で暮らすアフガニスタンからの避難者の実情にせまる】(坂西)
- 6日 HYOMIC 7 (坂西)
- 8日 NGO Lunch Talk「沖繩を抱える問題を考える」(坂西)
特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」(坂西)
- 9日 One World Festival for Youth運営委員会 (坂西)
神戸商工会議所 就労支援相談 (坂西)
- 10日 ロータリー米山奨学生カウンセラーミーティング (濱)
- 12日 神戸外国人救援ネット 運営委員会 (坂西、佐久間、濱)
- 13日 NGOの放課後 (坂西)
ダンスボックス 協議 (坂西)
神戸YMCA評議員会 (坂西)
- 14日 職員研修:メタファシリテーション講座② 講師:中田豊一氏
- 15日 「海外から国内への避難民、難民支援、多文化共生等事業領域の事業の現場から」(坂西)
- 16日 CODE寺子屋2022 (坂西)
尼崎北ロータリークラブ 訪問 (坂西、濱)
Nカゴ・アドボカシー第2回勉強会 (坂西)
- 17日 三田市就労支援セミナー (中村)
- 18日 Summe SDGs Festival for Youth (坂西)
ミャンマー米山学友会 総会 (坂西)
- 20日 【Nカゴ】第1回NGO経営チーム勉強会 (坂西)
- 21日 NGO-JICA 協議会 (坂西)
- 24日 コープこうべフードドライブ 譲渡会 (坂西、濱)
- 26日 株式会社ロメディ 訪問 (中島)
- 27日 ひょうごコミュニティ財団:NGO相談員 来訪 (坂西、中島)
長田区外国人トライやるウィーク 報告会 (坂西、中村、濱、三宅)
- 28日 神戸ポートワイズメンズクラブ:NGO相談員 (坂西)
- 29日 HYOGON 運営委員会 (坂西)
定例スタッフ会議 (古寺、坂西、佐久間、中島、中村、濱、芳田)
- 30日 HYOMIC 運営委員会 (坂西)
JANPIA休眠預金 協議 (坂西、佐久間)
- 10月
- 3日 長田区トライやるウィーク評価会 (坂西、中村、濱)
- 5日 サニーリハセンター 訪問 (坂西、中村)
- 6日 神戸YMCA国際委員会 (坂西)
NGO相談員ランチミーティング (坂西、中村)
- 8日 「開発協力大綱改定に対するアドボカシー:大橋正明さんと木口由香さんから学ぶ」(坂西)
- 12日 職員研修:メタファシリテーション講座③ 講師:中田豊一氏
- 13日 兵庫県立大学講演:NGO相談員
- 14日 加東市国際交流協会 訪問 (坂西、中村、濱)
- 15日 ミャンマーPHDと協議 (坂西)
- 17日 NGO神戸外国人救援ネット 理事会 (坂西、濱)
ミャンマーPHDと協議 (坂西)
- 19日 信愛学院高校 協議 (坂西、三宅)
- 20日 関西学院大学 講演:NGO相談員 (坂西、三宅)
- 22日 「グローバル・ソーシャルワークによる多文化地域共生社会の構築」
研究グループ講演:NGO相談員 (坂西)
- 25日 PHD協会 上半期振り返り会議 (坂西、佐久間、中島、中村、濱、芳田)
- 26日 定例スタッフ会議 (坂西、佐久間、中島、中村、濱、芳田)
- 27日 PL学院 協議:NGO相談員 (坂西、濱、三宅)
- 28日 えひめグローバルネットワーク 協議 (坂西)
- 31日 兵庫高校 講演:NGO相談員 (佐久間)



Summer SDGs Festival for Youth:NGO相談員ブース出展



協働事業:加東市国際交流協会「みんなのたけ」

PHD News

2022年度第38期研修生 帰国報告会のご案内

日時：2023年3月4日(土)
14:00～16:00(予定)
場所：長田区文化センター
別館ピレホール3階 会議室A(予定)
神戸市長田区若松町4丁目2-15
参加費：無料

お問い合わせはPHD協会まで
TEL: 078-414-7750
E-mail: info@phd-kobe.org



◆ 研修事業担当職員 広報・啓発担当職員 募集



2023年4月より研修事業担当、広報・啓発担当として、勤務していただける職員をそれぞれ1名(計2名)募集します。PHD協会の根幹である研修事業を担う方、広報・啓発全般を取り仕切る方、どちらも大きな責任は伴いますが、やりがいのある業務を担当していただけます。

募集説明会は随時実施いたします。関心のある方、ぜひご参加ください。

職員募集要項は
こちら



◆ 2018年度研修生 サビナさんインタビュー動画

2022年5月にネパール統一選挙に当選したサビナさん。インタビューにて、これまでの想い、これからの意気込みをお話いただきました。(当会報P7-10にて、特集とインタビュー記事の掲載をしております。ぜひご覧ください。)

PHD協会Youtube「草の根」チャンネルにて配信中です。



/ 草の根

インタビューは
こちら

youtube.com/@kusanone



○月×日のPHD協会

坂西 ある大学でミャンマーについて講演。想い溢れる。ウクライナも大変だが、ミャンマーも終わっていない。学生に想いが少し届いたのが救い。続。

佐久間 園に子どもを送ってから出社するので、事務所入りは一番乗り。ただ冬になるにつれ朝布団から出るのが遅れがち。一番乗り陥落の日も近い?

中島 季節の変わり目、気になるのは事務所の温度。寒くなってくると外より寒い事務所。悩みは服装。体感温度によって仕事の進み具合が結構変わる。

古寺 年末調整の作業をしながら、各職員にできるだけ多く還付金があるといいなと願う。会計担当にとって猫の手も借りたい年末の一コマ。

中村 仕事が早くて質が高いのが代名詞の中村。が、この○×の原稿だけは遅れがちで今回も催促を受ける。「嫌なわけではないので次回は」と本人談。

上から 37,047、2万、1,637、915、900 順。
(スマホに入っている写真の枚数)